

魚皮鞣し具

ナーナイ

高さ13.8cm、幅26.2cm

北方民族博物館だより
—35号—

特別展 神の魚・サケ—北方民族と日本—	2
講演会 サケをめぐる文化	5
連続講座報告 北方文化セミナー	7
お知らせ	9
News	10

神の魚・サケ—北方民族と日本—

開催期間 平成11年7月20日から9月26日（60日間）

北太平洋沿岸の人びとは古くからサケを利用してきました。河川あるいはその上流の湖で孵化したサケの稚魚は、海に下って大きく成長して再び故郷の川を遡上します。北方地域における陸の動物資源は少なく限られているなかで、北方諸民族にとってサケは海の恵みをもたらす<神>の贈物であり、生活の多くを支える特別な魚と考えられてきました。

日本列島においてもサケと人のかかわりの歴史は古く、近世以降、塩サケは最も身近なサケの加工品として流通してきました。そして、明治以降、遠洋漁業の発達のなかで北方海域のサケ資源が注目されるようになり、ロシア／ソ連領内におけるサケ漁や加工、母船式サケ漁が行なわれていました。これら北洋漁業と呼ばれるサケ漁業は、サケ缶詰生産によって近代日本の経済を支える産業でもありました。

時代とともにサケと人のかかわりは変化し、現代では“脂ののった”サケが好まれ輸入サケが増加する一方で、孵化放流技術の進展により来遊数が飛躍的に増えている国産サケの価格は低迷し、サケはもはや特別の魚ではなくなってきています。

今回の特別展では、北方諸民族や本州北部のサケ文化、北洋漁業の歴史の展示を通じて、サケが重要な資源であった時代のサケと人のかかわりを紹介するとともに、現代の先住民文化におけるサケの利用についても紹介しました。本特別展はサケを通じて地球の資源利用を考える機会でもあったと思います。

展示資料は当館収蔵資料・写真資料のほか、市立函館博物館、函館市北方民族資料館、函館市北洋資料館、財団法人致道博物館、村上市内水面漁業資料館、株式会社ニチロより、民族／民俗資料、歴史資料、写真・映像資料の借用ならびに提供を受け展示しました。以下にその構成に従って今回の特別展示の特徴を紹介します。

（1）北方民族とサケ

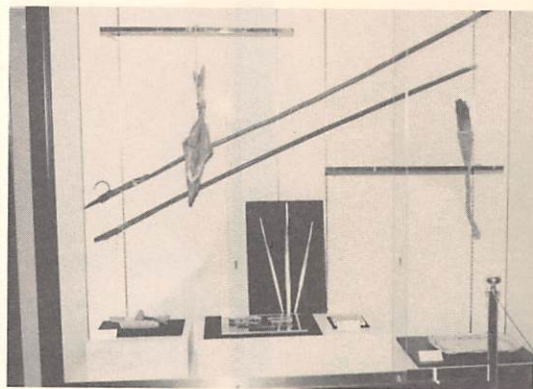
このコーナーでは具体的な展示資料を通じて北

方諸民族におけるサケをめぐる精神文化、サケの漁撈技術や食料利用、魚皮の利用などを紹介しました。

北方の狩猟採集民社会では、海、山、川などの自然界の各領域を支配する<神>や<主>といった超自然の存在が意識され、サケやささまざまな獲物はこれら<神>あるいは<主>たちが人間世界に送ってくる恵みと信じられてきました。とくにアイヌや北アメリカ北西沿岸のインディアン諸族にはサケに対する特別な儀礼や観念が発達しています。

これらの精神世界を示す具体的な資料として北海道アイヌのサケ叩き棒、北アメリカ北西海岸インディアン^{ナグ}の魚叩き棒、そしてアイヌのクマ送り儀礼に際し、神のもとへ送られるクマへの土産として祭壇に捧げられるクマ送り用サケを展示しました。

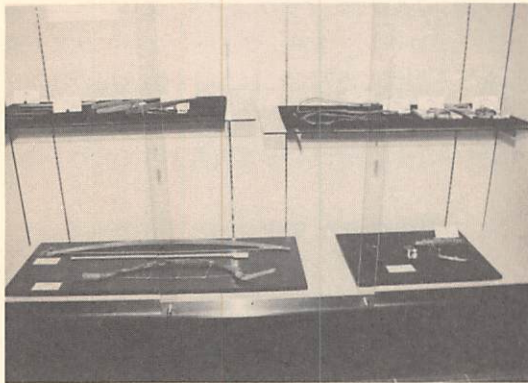
北方の伝統的なサケ漁の技術には魚止め罾などの施設や籠罾、ヤス、鉤などの突き取り具や掬い網や流し網、刺網などの小規模な網が用いられてきました。サケを突き取るにはヤスや鉤などが用いられてきましたが、大変興味深いことにはアイヌやニブフ、アムール流域のエヴェンキそしてカムチャツカ半島のイテリメン、エヴェン、コリヤークには大変よく似た「鉤罾」が共通してみられる点です。鉤罾は多くの場合、その鉤に「かえし」をもたず、鉤の先端が前方に向くように柄の先に半固定した状態で用いられます。そして鉤と柄は



北方における伝統的なサケの捕獲と利用

短い紐で繋がれていて、サケに突き刺さった鉤は柄から離脱するため、捕獲する際の衝撃が緩和されます。

当館収蔵のカムチャツカ半島のエヴェン、コリヤークの鉤鉞の鉤やサハリン及び北海道アイヌの鉤鉞(マレク)の鉤や中柄、柄、夜間漁用松明、サハリン・アイヌ、ナーナイの網針、サハリン・アイヌの鉤、北海道アイヌのマス用弓矢、北海道



北方におけるさまざまなサケ漁具

アイヌの産卵床用鉤の鉤、北海道アイヌのサケ用籠罟を展示しました。

アムール川(黒龍江)下流域やその支流の松花江、ウスリー河流域に住み、主に漁撈を行ってきた民族ナーナイでは、網やヤス、鉤などを用いて、シロザケ、カラフトマスやチョウザメなどさまざまな河川の魚類を獲り、食料としてきました。また、サケやコイ、チョウザメなどの魚皮を加工し、衣類をはじめさまざまな日用品を作ってきました。展示されたナーナイの漁撈具は舟の舳が舌状になっている丸木舟とその竿、垢汲み、舵取り用の櫂、帆柱、サケなどの魚皮製帆、ヤス、鉤、漁網で、すべて当館収蔵の資料です。

北方地域の場合、捕獲したサケは干し魚として利用することが基本ですが、サケの魚皮も衣類などに利用されてきました。サケの利用の観点で展示された資料はウイльтаのにこごり料理具、ウリチのイクラ干し皿、カムチャツカ・エヴェンのポルシャ、アイヌの干しサケ、アイヌのサケ焼き干



ナーナイの魚皮衣

し用単のほか、ナーナイ、サハリン・アイヌの魚皮鞣し具(複製資料)と鞣したサケ皮・イトウ皮やアイヌの魚皮製靴、ナーナイ、ウイльтаの魚皮製袋や太鼓などです。

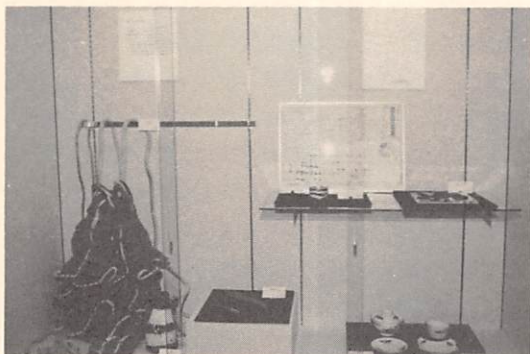
(2) 本州のサケ文化

このコーナーでは山形県最上川水系および新潟県三面川のサケ漁具などを通じて本州北部の伝統的なサケ文化を紹介しました。主な展示資料は流し網やもんべあみ、竹製のどう、鉤類で、網の材料にイラクサ科のカラムシが利用されていることや、袋柄状の離脱式の鉤類や離頭鉞と同じ形式のかさやす、サケの頭を叩くエビス棒などは北方との関係を考える上で興味深い漁撈具と言えるでしょう。また、7葉からなる「最上川大網の図」は明治初年頃の作と考えられ、当時のサケ漁の様子を伝えるものです。新潟県村上市にはいまなおサケの塩引きを競って作る風習が知られていますが、その塩引きを夏祭りまで干したものを薄く切り身にして酒、みりんに浸して食べる「酒びたし」が名物になっています。今回は村上市内水面漁業資料館の岡村博館長が調製した見事な塩引き鮭を展示することができました。

(3) 北洋漁業とサケ

後に北洋漁業と呼ばれるようになる北方海域における漁業は、明治以降、ロシア沿海地方への進出から始まり、ロシア領で捕獲したサケは塩サケに加工されて日本で販売されてきました。その後、日露戦争終結にともなうポーツマス条約に基づき、明治40(1907)年に締結された「日露漁業協約」は、日本に対しオホーツク海沿岸およびカムチャツカ半島などロシア領内におけるサケ漁業を認めたことから、北洋漁業はサケの豊富なカムチャツカ半島を中心に始まりました。その後、最盛期には租借漁区は300区を越え、缶詰工場をはじめ多くの加工施設が建設され、後には母船式流網漁も行われるようになりました。これらソ連領土・領海内における漁業は第二次世界大戦末のソ連参戦により中断を余儀なくされましたが、昭和27(1952)年に母船式サケ漁が再開されました。

このコーナーでは、日魯漁業とソ連の契約書(1932年)、漁場免許、各漁場の概要を記した「管轄漁場・漁場沿岸の概要・漁場地理の概要」、「管轄漁場・漁場地理の概況・漁区図」や漁場の日誌、各日毎の捕獲数を記した「漁況・漁獲日誌・漁獲予定及び実績」、当時の輸出用の缶詰ラベルなど、カムチャツカ半島における北洋漁業のあり方を伝える歴史資料が展示されました。さらに1997年にカムチャツカ半島南西部のオクチャイブスキーの海岸で収集された日本製木造漁船「川崎」の船釘類も歴史を裏付ける資料です。次に第二次世界大



北洋漁業で使用された資料

戦後の北洋漁業資料として、モッコ、浮き、あけぼの印サケ缶詰、船内食器、制裁用ナイフが展示されました。

また、大正10(1921)年、農商務省水産局が派遣した調査船鵬丸はカムチャツカ半島東海岸、チュコト半島、アラスカ沿岸の水産調査を行い、その際の写真はアルバムとしてまとめられています。ペトロパブロフスクをはじめベーリング島、オットラ湾、コルフ湾、アナディール、プロブデニア、セント・ローレンス湾、ウェーレンやアラスカ沿岸などを撮影した写真には、日本の漁場のほか、カムチャツカ半島およびチュコト半島の先住民の生活や文化を収めたものが多数含まれております。

(4) 現代のサケ文化

このコーナーでは現代のサケ製品や当館の調査によるカムチャツカ先住民の人びとのサケ漁やサケにかかわる文化などを実物資料や写真により紹介しました。

実物資料として、アラスカ産サケ缶詰、アラスカ産サケ燻油漬、サケ製品カタログ、北西海岸インディアン・クワキウトルのサケ彫刻木製皿が展示されました。さらに写真では東南アラスカのサケの加工やサケにかかわるトーテムポールなどが紹介され、カムチャツカについてはエヴェン、イテリメン、コリヤークの人びとの現代におけるサケの利用が紹介されました。

これらの展示内容は展示図録『第14回 特別展 神の魚・サケー北方民族と日本ー』としてまとめられています。1冊700円(友の会会員価格600円)で頒布しております。

本特別展はここ網走にサケの回遊漁が盛んになる9月26日に終了し、60日間の開催期間に5,687人の方々に観覧いただくことができました。サケが「神の魚」であり続けることを願うものです。

(学芸課 渡部 裕)

「サケをめぐる文化」

9月4日(土) 13:30-17:00 当館講堂

第14回特別展「神の魚・サケー北方民族と日本」の開催にあわせ、サケと人とのかわりについて3名の講師による講演会をおこないました。以下に各講演の要旨を紹介します。

■渡部 裕 (当館学芸課長)

「北方諸民族とサケ」

北太平洋には7種のサケ属魚種(サケ類)が分布するが、アジア側ではシロザケ、カラフトマスが多く、北アメリカ西海岸ではカラフトマス、ベニザケ、シロザケが多い。一般に、北方諸民族は河川でサケ漁をおこなってきており、その漁法は、(1)魚止め柵、(2)ヤスや鉤などの突き取り具、(3)各種の網をもちいる方法に大別できる。捕獲されたサケは食用とされるほか、皮は衣類や袋物、冬靴などの材料としてももちいられた。

サケは新鮮なまま調理される以外に、加工して保存食とされた。サケの一般的な加工法は乾燥で、アジア側では主として天日や風、北アメリカ西海岸では燻煙による乾燥がおこなわれてきた。干しサケを保存する際、魚体に含まれる脂質が酸化すると、味や臭いが悪化し、摂取した人体にも悪影響をおよぼす。シロザケはサケ類のなかでもっとも脂質が少ないため乾燥保存に適しており、北海道やサハリン、アムール川流域、カムチャツカ半島では干しサケの大部分がシロザケであった。脂質の多い魚種を乾燥させる際には、酸化を防ぐための工夫がみられた。サハリン・アイヌは、産卵後の脂質の少ないカラフトマスを乾燥させており、脂質が多い腹部(ハラス)を除去することも一般的にみられる。また、ベニザケなどの場合は、燻煙乾燥がおこなわれてきた。

脂質の少ない干しサケ中心の食事では、カロリー不足や代謝不良を起す場合がある。そのため、補完的に油脂を摂取する必要がある。干しサケをアザラシ油や魚油に浸して食べる習慣が一般的にみられた。

サケは、イヌの餌としても利用されてきた。北太平洋沿岸地域では、干しサケの中骨、頭などが

橇犬や猟犬の餌とされてきた。カムチャツカ半島のイテリメンの場合は、乾燥した卵巣や地中で発酵させたサケをイヌに与えていた。なお、北海道・サハリンの先住民は干しサケを飼育しているクマの餌として手厚く扱い、アイヌのクマ送り儀礼では、干しサケをクマに贈る土産のひとつとしてきた。北方諸民族の精神文化のなかでもサケは重要な位置を占め、とくにアイヌや北アメリカ北西沿岸のインディアン諸族には、サケに対する儀礼や観念が発達している。

1998年8~9月にロシア、カムチャツカ州でおこなった調査では、先住民が伝統的な方法でサケ漁をおこない、調理・加工して生計を維持している姿がみられた。ロシアでは、ソ連体制崩壊後の経済的混乱状態が続くなか、先住民にとってのサケ漁が重要性を増してきている。

■今野庄一氏 (前網走漁業協同組合サケ定置部会長)

「網走のサケ漁の歴史—戦後から現在まで—」

1952(昭和27)年の新漁業法施行時に、網走では82名の漁業者、4つの生産組合が定置網漁業の免許を受け、36ヶ所に定置網が設置された。当時のサケ漁獲数は30~40万尾程度であったと思われる。それ以来、47年間に漁業経営の合理化が進められ、現在経営母体はひとつの共同体となっている。昨年度は12ヶ所に定置網が設置され、直接の漁業従事者は80名だった。

全道のサケ漁場は、オホーツク、根室、襟裳以東、襟裳以西、日本海の5つの海区に分けられているが、このうちオホーツク海区の漁獲比率は約1/3に上る。また、網走漁協の漁獲高は、漁協別で全道第5位となっている。網走で捕れるサケは、魚体が銀色をしたもの(銀毛)よりも婚姻色が色濃く浮き出たもの(ブナ毛)が多い。一説では、サケは卵の成熟度に合わせて沿岸に近づくため、産卵場所が下流だとブナ毛で接岸するといわれている。網走では稚魚の放流や親魚の捕獲が下流でおこなわれているため、ブナ毛のものが多いのかもしれない。加工場などでは魚体より卵を重視す

る傾向があり、ブナ毛の卵は成熟していて品質が高いため、価格的には銀毛とブナ毛に大差がない。

孵化放流技術や漁具・漁法は、向上してきている。稚魚は成長するにつれて敏捷になり、危険回避能力が高まるため、餌付けをして成長を促進している。また、水温が上昇すると餌となる川の生物が増加するため、放流する時期を考慮している。これらの結果、北見管区では、回帰率が30年前の約6倍に上昇した。定置網は、落網から底建網になったことで時化に強い構造になり、また化学繊維の普及によって網の強度や耐久性が増し、魚網の破損は減少した。

サケ定置網漁の今後の課題としては、経営の合理化があげられる。しかし、1979（昭和54）年に不採算漁場の解消や企業体・漁場の統合など大規模な合理化をおこなっているため、現状ではこれ以上は困難である。また、国の方針によってサケ増殖事業における漁業者の負担が増大するが、増殖経費の節減などで対処していきたい。サケの魚価は、1977（昭和52）年に1kgあたり1,044円の高値を記録してから次第に下落し、1994～1998（平成6～10）年の平均では1kgあたり178円にとどまっている。近年は供給過多のため、魚価の上昇はあまり期待できないのが現状である。



■岡村博氏（イヨボヤ会館（村上市内水面漁業資料館）館長）

「越後村上鮭談義」

三面川（新潟県村上市）のサケ漁は、村上市の歴史・文化の形成に大きな影響を与えてきた。村上市では、サケ文化の伝承と発展、自然との共生を目指す地域モデルとして鮭公園（サーモンパーク）を整備しているが、その中心施設は「イヨボヤ会館」と名づけられている。「イヨボヤ」は村上地方の方言でサケを指す言葉で、「イオ」は魚、「ボヤ」は姿形が立派な魚につける接尾語である。村上では、親しみを込めてサケを「イヨボヤ」と呼んできた。

サケは古くから越後の国（新潟県）の産物であった。平安時代に著された『延喜式』では、サケを朝廷に納める国のひとつとして越後が記されている。また、平安時代末期に越後国司が発した国宣では、三面川を国領とし、サケの捕獲を禁止している。越後のサケが珍重され、なかでも三面川が重要視されていたことがわかる。

江戸時代、村上藩にとってサケ漁の運上金は大切な収入源であった。ところが1720年代以降不漁が続いたため、藩を上げてサケ増殖に取り組み、「種川の制」を作り出した。これは、川に設けた分流（種川）にサケを導き、産みつけられた卵や稚魚を保護するというもので、世界最初のサケの人工増殖とも言われている。種川の工事は1763～1794年まで30年以上にも及んだが、完成後サケ漁の運上金は順調に増加した。

明治に入り、三面川の漁業権を引き継いだ旧士族たちは、人工孵化の技術の導入や孵化場の建設など、種川と並行してサケの増殖に力を注いだ。1882年、旧士族の漁業組織は「村上鮭産育養所」に改められた。育養所によるサケ漁は約80年間続いたが、その収益は治水や慈善、教育などの公益事業にも充てられた。育養所の育英制度で勉学した者は「鮭の子」と呼ばれ、多くの「鮭の子」が政界、財界などで活躍してきた。

現在でも村上にはサケをめぐるさまざまな伝統

「魚と暮らし—アイヌと
その周辺民族の漁撈文化—」

第1回 9月12日(日) 14:00 - 15:30

「民族考古学と漁撈」

—北海道そしてアラスカへ—

講師 岡田 宏明(当館館長)

が残っている。例えば、男の子の5歳を祝う宴会料理の主役はタイではなく、三面川のサケである。荒波を越えて三面川に戻ってくるサケにあやかり、わが子もたくましく人生を全うして欲しいという親の願いが込められている。また、11月末ころからサケの伝統的な加工法「塩引き」づくりが始まる。「塩引き」とは塩をすり込み、乾燥・発酵させたサケで、村上の気温、湿度、風などの気候条件が揃って初めて適度に旨味が醸成される。

これらのサケをめぐる伝統は、次代に引き継いでいくべき地域文化である。また、近年全国鮭サミットの開催や北太平洋のサケをめぐる人びととの連携・連帯を通じて、新たなサケ文化の創造を目指している。



* * *

本講演会には、サケに直接関わる漁業関係者の方々も参加され、講師が用意したスライドやビデオに熱心に見入る姿がみられました。

(学芸課 中田 篤)

今回のセミナーの口火を切る第1回目の岡田館長の講演は、全体の基調となる北方地域における基本的漁撈文化のあり方やその成立過程についての概説が中心となった。最初にビデオによりアラスカにおけるヨーロッパ系の人たちによるサケをはじめとする近代の漁業が紹介された。ビデオはアメリカの漁業会社PAF(Pacific American Fishing Company)が近年制作した「サケの黄金時代」で、1920年代から30年代のサケ漁や缶詰工場の操業状況やプリストル湾を中心とした沿岸の集落の生活などが紹介され、小型帆船によるサケ漁や金網を使った大掛かりなサケ捕獲用の追い込み罟など、日本の漁法とは異なる当時のアラスカにおけるサケ漁のあり方も記録されている。

次に岡田館長が調査を行ったネルソン島に住んできたアイヌの漁撈を中心とする海洋資源のあり方が詳しく紹介された。そして、館長自身の調査やカナダ、アメリカの考古学者の調査に基づき、アリューシャン列島や東南アラスカにおける海洋適応文化の成立過程が紹介された。

アリューシャン列島には9,000年前からヒトが住み始め、少なくとも4,000年前から海の資源を利用した海洋適応的な文化がみられるようになる。また東南アラスカの北西海岸インディアンの食料獲得活動をたどると、9,000年前や7,000年前からヒトの活動はみられるが、その後はヒトの活動が活発になる3つの時期、約5,500~3,500年前(前期)、3,500年前~1,500年前(中期)、そして1,500年前からヨーロッパ人が来る頃まで(後期)に分けられる。大雑把に言うと、前期から厚く堆積した貝殻がみられるものの、中期になると貝塚が大規模になり、木造の定住的住居が作られある程度安定した集落が形成される。骨や角で作られた道具には幾何学模様をはじめかなり洗練された模様をつけられるようになる。あるいは貝で作っ

た腕輪など装飾品も多く出始め、社会の階層化が始まったことを示している。さらに後期になると、現在の北西海岸インディアンの文化とほとんど変わらない、さらに洗練された芸術品が数多く出てくる。このようにアメリカ大陸の北太平洋沿岸では、海洋適応文化が長い歴史の上に形成されてきた。

最後に、東南アラスカのメトラカトラ村の調査から、サケをはじめとする海洋資源を利用してきた現代のツィムシヤンの人びとの文化をスライドで紹介した。

第2回 9月16日(木) 19:00 - 20:30

「魚を捕るーアイヌとカムチャツカ先住民の
漁法を比較してー」

講師 渡部 裕 (当館学芸課長)

第2回目ではサケの捕獲技術に焦点をあて、とくにアイヌとカムチャツカ半島の先住民の漁法を紹介しました。以下にその概要を紹介します。

狩猟や漁撈、採集を生活の手段としてきた北方諸民族にとって、漁撈はとくに重要な生業活動であった。狩猟は対象とする動物の移動性が高いことや、猟場が離れているなど、捕獲効率が低く安定した資源となりにくい。その点漁撈の場合には魚種による季節性はあるが、各魚種の捕獲時期を組み合わせると捕獲時期は長く、大量に捕獲することも可能である。北太平洋に分布する7種のサケ属魚種は、季節的に安定した資源として沿岸の諸民族に利用されてきた。アイヌにとってサケは《神の魚》と考えられたようにサケは生活の基本となってきた。また、千島列島の北に位置するカムチャツカの先住民もサケを生活の基盤に置いてきた民族である。

アイヌの漁撈は主に川で行われていたが、海でも漁撈を行ってきた。ニシンなど、季節的に沿岸に来遊する魚種だけではなく、オヒョウなどの釣魚も行われていたと思われる。また、太平洋沿岸

のアイヌでは大型のメカジキやマグロ、ブリ、マンボウなどの鮭魚も行われていた。川における漁法は柵を設置して網や籠罟で捕獲する方法や小型の網、鉤鮭による突き捕りなどが知られている。また、冬季の川や湖の氷上の釣も行われていた。

カムチャツカの先住民、イテリメン、コリヤーク、エヴェンも基本的にはアイヌと同じ方法でサケを捕獲していたと考えられるが、海における釣はほとんど行っていなかったと思われる。

アイヌのサケ漁に用いられる鉤鮭・マレクと同じ道具がカムチャツカで用いられている。鉤の形状や柄に装着する方法に違いはあるが、基本的な機能は同じと考えられる。サケを基盤とする文化の共通性を示すものの一つであろう。

第3回 9月30日(木) 19:00 - 20:30

「シベ(本当の食べ物)ー主食としての魚ー」

講師 渡部 裕 (当館学芸課長)

第3回目のセミナーではサケを中心に魚の加工や調理など、食料利用を紹介しました。最初にアイヌの魚の調理に触れ、次いで江戸期の文献にあらわれる魚の加工の記述から当時の加工方法を考えてみました。さらに、カムチャツカ先住民の魚の加工や調理を紹介し、北方における主食としての魚の利用を概観しました。以下に概要を紹介합니다。

織田ステノさんによる静内地方のアイヌの魚の調理を例にみると干しサケのほかにもさまざまな調理方法があることがわかる。北方の食料では油脂が多く摂取されるが、アイヌではアザラシ油とともに魚油が多く利用されてきた。タラやイワシの油脂採取方法やその保存法にもさまざまな知恵がみられる。

今号の表紙 — 魚皮鞣し具 —

北方民族にとって、大量に手に入る魚皮を有効利用しない手はない。事実、北方のいくつかの民族では、サケ類を中心とした魚皮から上衣、脚絆、靴、袋類、楽器、テントの覆い、船の帆などを作っていた。今号の表紙の「魚皮鞣し具」は、それらの製作行程で重要な位置を占める道具である。木の台の中央のくぼみに魚皮をあて、木槌でたたいて柔らかくする。この道具で良く鞣すことによって、防水性に富み、布にも劣らぬ、しなやかで、軽い製品が生まれる。

北方民族の中でも、特に魚皮製品の品質や技術が発達しているのは、アムール川中下流域からサハリンに居住してきたニブフ、ナーナイ、ウリチといった民族である。彼等は、魚皮で作った肌触りの良い衣服を、温暖な時期には好んで着用していたようである。特に、いつの時代も、どんな場所でもオシャレに気を使う女性にとって、衣服に関する関心度は高く、自らの才能や技術の多くをつぎこんで様々な装飾を行っている。

当館にも、美しい紋様で飾られた魚皮の衣服が数点あります。関心のある方は、ぜひ一度足を運んでみて下さい。



ナーナイの魚皮なめし方
Смоляк, А.В. 1984 Традиционное хозяйство и
материальная культура народов Нижнего
Амура и Сахалина. Наука

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 7/1 弥生時代の日本列島全域を視野に入れた特別展示「新弥生紀行-北の森から南の島へ」開催、北海道開拓記念館/D(夕)
- 7/4 アイヌ民族の英雄、コシャマインの慰霊祭開催、上ノ国町/M
- 7/17 幕末から明治初期のアイヌ民族の暮らしぶりを中心とした「アイヌの四季と生活展」開催、北海道立帯広美術館/Y
- 7/28 森林公園いこいの森の町郷土資料館は北海道の名付け親、松浦武四郎の歌碑を掛け軸にして公開、丸瀬布町/D
- 7/31 2年がかりのオホーツク文化期の竪穴式住居模型が遂に完成、羅臼町郷土資料室/D(夕)
- 7/31 萱野茂・二風谷アイヌ資料館館長創設の「アイヌ語育英資金」で、女性2人がアイヌ語に挑戦、平取町/AS
- 8/4 北海道庁がアイヌ文化の総合的な伝承や理解を目的とした、アイヌ文化空間を構想/D
- 8/10 総進不動坂遺跡で20~30万年前と見られる地層から、原人の存在を示す前期旧石器出土、新十津川町/D
- 8/10 北海道ウタリ協会が「99国際先住民の日記念事業~先住民セミナー・古式舞踏公演」開催、網走市/A
- 8/17 江戸時代にロシアから根室に帰還した大黒屋光太夫を描いた「ワロシヤ船併人物図」発見、ロンドン/D(夕)
- 8/21 アイヌ民族研究に生涯を捧げた故吉田巖氏の「アイヌ調査書」出版、帯広市/D(夕)
- 8/21 アイヌ民族の伝統儀式「チブサンケ」開催、平取町/M
- 8/29 アイヌ語表記に必要な20字をJIS規格に登録申請/AS
- 9/2 アイヌ民族舞踏団体「帯広カムイトゥウボボ保存会」が民族衣装「チジリ」製作/M
- 9/4 16世紀末から17世紀初めの出土層から、アイヌ民族のイクバスイ(酒はし、杯はし)発見、上ノ国町/D
- 9/7 旭川デザインギャラリーで故松井梅太郎氏と柴崎重行氏の「木彫り熊・源流展」開催/D(夕)
- 9/10 後期旧石器時代の国内最大級(長さ31センチ)黒曜石製舟形石器出土、白滝村/Y
- 9/11 アイヌ民族博物館でアイヌ民族の楽器「ムックリ(口琴)」作りの体験学習講座、白老町/D(夕)
- 9/16 札幌豊平川でアイヌ民族の伝統儀式「アシリチェツブノミ」開催/D(夕)

※A: 網走新聞、AS: 朝日新聞、D: 北海道新聞
M: 毎日新聞、Y: 読売新聞
複数紙掲載の場合は抜い大きい方を紹介しています。

■寄贈資料紹介

- ・東京都の風間伸次郎氏からナーナイのひしゃく1点、白樺樹皮製容器2点が寄贈されました。
- ・札幌市の大島稔氏から毛皮、アリュートのアザラシ回収用鉤各1点が寄贈されました。
- ・札幌市の谷本一之氏から、ハンティのクマ送り用の仮面4点、木製杖、手袋、帽子各1点が寄贈されました。
- ・藤沢市の遠藤洗一氏から故遠藤欣一郎氏の旧蔵書44点が寄贈されました。当館では遠藤文庫として整理しました。
- ・山形県羽黒町の板垣長蔵氏から、わらぐつ1点、あしなか2点が寄贈されました。
- ・札幌市の甲地利恵氏からコリヤークの太鼓、ばち、人形各1点と衣服の飾り3組が寄贈されました。
- ・北海道標茶町の磯嶋恵美子氏からサハの口琴1点が寄贈されました。
- ・サハリンのゾートフ=ミハイロビッチ氏からロシアの短靴1点が寄贈されました。

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等

- ・木村英明1997『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会
- ・木村英明1998『シベリアの細石刃石器群—考古資料集2』札幌大学文化学部考古学研究室
- ・木村英明1999『シベリアの細石刃石器群—考古資料集8』国立歴史民俗博物館春成研究室

- ・大林太良1999『銀河の道 虹の架け橋』小学館
- ・石森秀三1999『博物館概論—ミュージアムの多様な世界』放送大学教育振興会
- ・講談社1999『目録20世紀13』
- ・放送大学制作部1999『博物館概論—第7回民族の博物館』(VHSビデオテープ)

■主な来館者

- 7/14 中国社会科学院研究者・国立奈良文化財研究所研究者・通訳各1名
- 7/22・23 アラスカ大学サウス・イースト校
プリシラ・ショルティエ教授
- 8/24 大韓民国・嶺南大学校工科大学より4名
- インド、チリカ開発局
A.K.パトナイク氏 ほか4名
- 9/9 道議会文教委員長ほか12名
- 9/29 国立民族学博物館
松山利夫教授

■その他の行事報告

- 7/6(土) 講習会
「ウイルトのお人形づくり」
- 9/11(土) 博物館クラブ
「ぬり絵で作るイヌイットの着せ替え人形」

■観覧者動向(7~9月)

	常設展	特別展
7月	5,151	931
8月	6,005	3,065
9月	5,355	1,691
計	16,511名	5,687名

■行事案内(12~1月)

- 12/11(土) 博物館クラブ
「北方の文様で作る年賀状」
- 12/24(金) ロビーコンサート
- 1/22(土) 博物館クラブ
「石器を使ってみよう」
- 1/23(日) 講座
「映像に見る北方先住民の狩猟と精神文化」

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおりして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

■職員の異動

採用(10/1付) 学芸員 角達之助

■編集後記

今号から担当が変わりました。よろしく願います。(角)